

マタイによる福音書7章1～14節

●イエス・キリストの「山上の説教」(マタイ 5 章～7 章)は、「これを守らなければキリスト者失格だ!」と教えているのではなく、「人は誰も神が求めておられることを完全には行えない弱い存在なのだ」ということを伝えようとしています。それはとりわけ、傲慢になって人を裁き、社会に分断や差別を助長していた当時の宗教家たちを意識して語られたと言えるでしょう。

●今日の箇所ではイエス様は、まず人の目の「おが屑」を取ろうとする前に「自分の目の中の丸太」に気づくようにと教えられます。他人の欠点は見えやすくて、自らの罪や傲慢には気づかない私たち人間に、自省と謙遜を促しておられるのです。また、「豚に真珠を与えるな」とは、神の掟や善意を一方的に押しつけず、相手の立場に立った配慮と知恵を持って接することの大切さを語っています。

そして 7 節以降でイエス様は、神というお方は心から赦しや救いを求め続ける人に対して深い憐れみをもって応えられるのだということを示し、「だから人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」という“黄金律”を語られました。それは、相手の立場に立って考え、本当に必要なものを与えようとする小さな配慮、真の思いやりの実践です。

●アメリカで救急医学の研究者で医師であるステファン・トシェシアク氏は、自身の研究で「40 秒の思いやり」が患者の治癒力を高めるだけでなく、支える側の心も守るという結果を示しています。そして、自分は誰よりも思いやりを持った医師なのかというところではないが、すでにそのような思いやりの力を実践によって証している人々がいる。そこに希望がある、と語っておられます。私たちもまた、イエス様の「山上の教え」をなかなか守れない一人ひとりです。けれども、確かにイエス・キリストが身をもってそれを示され、その主の憐れみに触れて自らも神の愛と憐れみを世に示す人々が確かに起こされてきたことを思い起こしたいのです。

●イエス様は最後に、「狭い門から入りなさい。…命に至る門は狭く、その道は細い。それを見いだす者は少ない。」と語ります。人を裁かず、自分の罪を認め、他者に憐れみをもって接する道は決して易しいものではありません。しかし、それが「命に至る道」とであるとイエスは明言されます。

昨今、自己中心的な風潮が広がっていますが、その道の果てに待っているのは、分断と他者への共感に欠けたギスギスとした息苦しい社会です。このような現代だからこそ私たちは、神の憐れみを求め、日々の小さな思いやりと配慮に生きる者になりたい。そう願います。